Japanese Association of Educational Psychology

166　Jap. J. of educ. Psychol, VOL. XVIII, No. 3 (1970)

日本語の程度量表現用語に関する研究

名古屋市立女子短期大学

織　田　揮　準

問　題

ことばが心理学研究における研究者—被験者のコミュニケーションの手段として，また，研究の成果の伝達手段として重要な役割を演じていることは，いまさらいうまでもない事実であり，今後とも利用されるであろう。しかしながら，ことばを心理学研究の手段として考える場合，そこにはいろいろな問題がある。たとえば，質問紙法や面接法などにおいて，研究者の発する質問が，はたして研究者の意図通りに被験者に正しく理解され得るといえるであろうか。この問題に関連した研究としては，近藤ら（1966）の質問紙法に関する基礎的研究の一環として行なわれた児童・生徒の日常生活で用いられる人格表現用語（明るい人，短気な人など）の具体的な意味づけの実態調査や続ら（1966），山田ら（1967）の心理学的臨床分野で用いられる性格表現用語に関する全国のクリニカル・サイコロジストの理解についての調査報告がある。これらの研究結果によると，性格表現用語の理解あるいは具体的な意味づけの個人差は児童・生徒にあるばかりでなく，クリニカル・サイコロジスト相互間にもかなりの個人差が認められるとしている。また，続ら(1967)は質問紙法による性格検査の作成にあたり，内容的に同じ次元に沿って作られた，いくつかの項目に対する反応相互間の相関係数は意外に低く，かえって他の次元に沿って作られた項目への反応との間に高い相関関係が認められたとしている。さらに，内容的妥当性があると一般に考えられているY—G性格検査の同一尺度内の項目相互間の相関係数（尺度の内部相関）が，予想外に低いことが明らかにされている（続ら，1970）。これらの数少ない研究からも，研究者と被験者間には質問項目，あるいはことばに対する意味のとり方の相違があり，言語による人間理解が必ずしも満足すべき水準にあるとはいえない。研究者の意図を正しく被験者に伝達するためにも，また，被験者の言語による反応からその意味を正しく理解するためにも，ことばの研究が進められなければならない。

本報告は評定尺度研究の一環として，程度量表現用語，たとえば，(1)非常に，かなり，ややなどの現実の程度量表現用語，(2)きっと，たぶん，おおかたなどの実現の程度量（確信）表現用語，(3)いつも，ときどき，たまになどの時間的程度量（頻度）表現用語，および，(4)さっき，いま，じきに，まもなくなどの心理的時間の程度量表現用語をとりあげ，これらのことばが具体的にどのように理解されているかを発達的に明らかにしようとするものである。程度を量ることばの研究は国文法，国語的な観点から行なわれているが，心理学的な観点からの検討が行なわれないまま，評定尺度の判断カテゴリー用語として使用されてきた。織田（1967）はこのような問題意識のもとに程度量表現用語の収集と分類を試み，さらに児童，生徒，大学生および成人がこれらのことばをいかに理解しているか，その実態調査を行なった。本報告は先の調査をもとに，標本数を増した程度量表現用語に関する実態調査の結果である。

方　法

I．程度量表現用語

本研究に用いられた程度量表現用語は，織田（1969）の程度量表現用語のリストにもとづき，評定尺度の判断カテゴリー用語として比較的頻繁に使用されているものが選ばれた。その内訳は次の通りである。

a．実現の程度量（確信）表現用語……16語
b．現実の程度量表現用語……18語
c．時間的程度量（頻度）表現用語……16語
d．心理的時間の程度量表現用語……18語
　(イ)過去表現用語……9語
　(ロ)未来表現用語……10語

II．調査対象

程度量表現用語の理解水準は被験者群の発達水準によ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ってかなり異なるが，高校生の理解水準は成人のそれとほぼ一致することが先の研究により明らかにされた（織田，1969）。そこで今回は，ことばの理解水準の低いと考えられる小学4年，6年，中学2年を選び，また成人群として大学生を調査対象とした。なお，先回の調査の対象は1調査あたり100名から200名と少なかったが，今回は1調査あたり300名から500名に標本数を増した。調査対象は愛知県下の岡崎市，安城市および名古屋市内の小・中・大学生である。その内訳はTable 1の通りである。

Table 1　調査別有効被験者数

調　　査	大学生	中学2年	小学6年	小学4年
調　査　Ⅰ	478	505	544	469
調　査　Ⅱ	481	536	407	419
調　査　Ⅲ	479	508	472	545
調　査　Ⅳ—1	323	536	477	578
調　査　Ⅳ—2	323	532	479	577
計	2,084	2,617	2,379	2,588

Ⅲ．調査票

選択された程度量表現用語相互間の程度量に関する一対比較判断（二件法）を求めるにあたり，下記の要領で4種類の調査票が作成された。各調査の質問および回答形式は次の通りである。

調査Ⅰ　実現の程度量（確信）表現用語の調査で，形式は次の通りである。

A．きっと　きます
B．たぶん　きます

A，Bいずれの表現が「きます」という気持（確信）がより強いか，その判断を求める。120 問，16語

調査Ⅱ　現実の程度量表現語の調査

A．かなり　大きい　　A．あまり　大きくない
B．ひじょうに　大きい　　B．やや　大きい

A，Bいずれが「より大きい」ことを表現するか。なお，「あまり」「ほとんど」「すこしも」「ぜんぜん」の4語には「大きくない」を用い，「どちらともいえない」については「大きいとも小さいともどちらともいえない」の表現をとった。153 問，18語

調査Ⅲ　時間的程度量（頻度）表現用語の調査

A．いつも　する　　A．たまに　する
B．ときどき　する　　B．めったに　しない

A，Bいずれが「より高頻度」をあらわすか。なお，「あまり」「めったに」「ほとんど」「ぜんぜん」「まったく」の5語は「しない」を用いた。120 問，16語

調査Ⅳ　心理的時間の程度量表現用語の調査で，調査Ⅳ—1と調査Ⅳ—2に分かれる。

調査Ⅳ—1　過去表現用語の調査（36問，9語）

A．さきほど　おわりました
B．すでに　おわりました

調査Ⅳ—2　未来表現用語の調査（45問，10語）

A．まもなく　はじまります
B．じきに　はじまります

A，Bいずれが「より古い過去（調査Ⅳ—1）」を，また，「より近い未来（調査Ⅳ—2）」を意味するか。

Ⅳ．実施

調査の実施にあたり，小学生には1人あたり1ないし2種類の調査，中学生には2～3種類，大学生は3～4種類の調査を集団的に実施した。小・中学生の調査実施は担任教師に依頼した。

調査は昭和44年1月から3月にかけて実施された。

結　　果

調査ごとに程度量に関する判断の比率行列が作られた*。更に，判断の比率行列にもとづき，程度に関することばの尺度値が，J. P. ギルフォード（1954）のケースVにもとづき算出された。

Table 2～6は小学4年，6年，中学2年，大学生の4群の一対比較判断による比率行列を1つの表にまとめたもので，枠内の左上が大学生，右上が中学生，左下が小学6年生，右下が小学4年生の結果である。なお，程度量表現用語の配列の順番は大学生群の尺度値に従った。

次に，調査ごとにその結果を通観する。

Ⅰ．実現の程度量（確信）表現用語（調査Ⅰ）

程度量表現用語の共通理解が成立しているか否かの判定基準は，研究の目的や研究者の判断によってかなり違う。そこで，ここでは一対比較判断の比率の差の検定といった観点からではなく，経験的な観点から判定基準を設定した。すなわち，一対比較判断の比率がいずれか一方に75%以上偏っている場合に，そのことばについての共通理解が成立しているとみなすことにする（75%基準）。

75%基準に従って実現の程度量（確信）表現用語16語を分類すれば，大学生群の場合次の通りである。

＊　調査結果の処理は，名古屋大学教育心理学教室の電子計算機 NEAC 1240 によって行なわれた。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

1. 最強度の確信を量ることばで，さらに4つに下位分類できる。確信の強い順に示せば，次の通りである。

1.1　絶対に，(必ず)

1.2　(必ず)，(断然)

1.3　(断然)，きっと，たしかに，うたがいなく，

1.4　程度を量る修飾語をとらない表現，この調査では「きます」がここに属する。

2. 中程度の確信を表現することばで，次の5語がここに属す。

たいてい，たいがい，たぶん，おそらく，おおかた

3. 低度の確信表現語で，次の4語である。

もしかしたら，ことによると，どちらかといえば，ひょっとして

この分類は中学2年群，小学6年群の結果とほぼ一致するが，小学4年群では大分類1と2に属することば相互間の意味の分化があいまいである。たとえば，小学4年群では「断然」という強度の確信表現と中度の「たいてい」「おおかた」や「もしかしたら」の間に意味づけの差異が75%基準では認められない。Fig. 1は程度量表現用語の尺度値と分類結果を図示したものである。

II. 現実の程度量表現用語（調査II）

現実の程度量表現用語18語を75%基準で分類すれば，

Table 2　実現の程度量（確信）表現用語の比率行列と尺度値

（小学4年469名，小学6年544名，中学2年505名，大学生478名）

	1 ぜったいに	2 かならず	3 きっと	4 たしかに	5 だんぜん	6 うたがいなく	7 (きます)	8 たいてい	9 たいがい	10 たぶん	11 おそらく	12 おおかた	13 もしかしたら	14 ことによると	15 どちらともいえない	16 ひょっとして	尺度値 大学生	尺度値 中学2年	尺度値 小学6年	尺度値 小学4年
1 ぜったいに	**5**	**6 7** **7 6**	7 6 7 6	9 8 8 8	9 8 9 8	9 8 8 8	9 8 9 7	9 9 9 8	9 9 9 8	9 8 9 8	9 8 9 8	9	9 8 9 8	9 9 9 8	9	9 9 9 8	3.20	2.17	2.63	1.97
2 かならず	**3 2** *2* **3**	**5**	7 6 7 6	9 8 8 8	**7 6** **6 6**	7 7 **7 7**	8 7 7 **7**	9 8 9 8	9 8 9 8	9 8 9 8	9	9 8 9 8	9 9 9 8	9	9 9 9 8	9	3.10	2.06	2.38	1.87
3 きっと	*2* **3** *2* **3**	*2* **3** *2* **3**	**5**	**5 5** **4 6**	**5 6** **5 6**	**7 6** **6** *7*	8 *7* 7 **7**	9 9 8 8	9 9 9 8	9 8 9 8	9 9 9 8	9	9	9	9	9	2.84	1.98	2.22	1.81
4 たしかに	1 1 1 1	0 1 1 1	**4 4** **5 3**	**5**	**4 4** **4 4**	**7 6** **7 6**	8 *7* 7 **6**	9 8 9 *7*	9 8 9 8	9 8 9 8	9 8 9 8	9	9 9 9 8	9 9 9 8	9	9	2.62	1.76	2.20	1.56
5 だんぜん	0 1 0 1	**2 3** **3 3**	**4 3** **4 3**	**5 5** **5 5**	**5**	**5 4** **4 4**	8 **7** 7 **6**	9 8 8 **7**	9 8 8 8	9 8 8 7	9 8 8 7	9 8 8 **7**	9 *7* 7 **6**	9 9 9 8	9 8 9 8	9 8 9 8	2.49	1.63	1.92	1.39
6 うたがいなく	0 1 1 1	*2 2* **2 2**	**2 3** **3** *2*	**2 3** **2 3**	**4 5** **5 5**	**5**	7 **6** 7 **6**	9 8 8 **7**	9 8 8 *7*	9 *7* 8 **7**	9 8 8 *7*	9 8 8 8	9 8 9 8	9 8 9 8	9 9 9 8	9 8 9 8	2.44	1.53	1.87	1.38
7 (きます)	1 1 1 *2*	1 *2* *2* **2**	1 *2* *2* **2**	1 *2* *2* **3**	1 **2** *2* **3**	*2* **4** **2 3**	**5**	9 8 8 *7*	9 8 8 *7*	9 8 9 8	9 8 8 *7*	9 8 8 **7**	9 9 9 8	9 9 9 8	9 9 9 8	9 9 9 8	2.30	1.52	1.75	1.34
8 たいてい	0 0 0 1	0 1 0 1	0 0 0 1	0 1 0 *2*	1 1 1 **2**	0 1 1 **2**	0 1 1 *2*	**5**	**5**	**6 4** **4 5**	**6 6** **6 5**	**6 6** **6 5**	9 9 9 8	9 9 9 8	9 9 9 8	9	1.56	1.00	1.17	0.98
9 たいがい	0 0 0 1	0 1 0 1	0 0 0 1	0 1 0 1	0 1 1 1	0 1 1 *2*	0 1 1 *2*	**4**	**5**	**5 4** **4 4**	**5 4** **4 4**	**5 5** **6 6**	9 8 9 8	9 8 9 8	9 9 9 8	9 9 9 8	1.38	0.87	1.09	0.86
10 たぶん	0 1 0 1	0 1 0 1	0 1 0 1	0 1 0 1	0 1 1 *2*	0 *2* 1 **2**	0 1 1 *2*	**3 5** **5 4**	**4 5** **5 5**	**5**	**3 5** **5 5**	**3 5** **5 5**	9 8 9 8	9 8 9 8	9 8 9 9	9	1.37	0.95	1.14	0.93
11 おそらく	0 1 0 1	0 0 1 1	0 0 0 1	0 1 0 1	0 1 1 *2*	0 1 1 *2*	0 1 1 *2*	**3 3** **3 4**	**4 5** **5 5**	**6 4** **4 4**	**5**	**4 5** **5 5**	9 8 9 8	9 9 9 8	9 8 9 8	9 9 9 8	1.36	0.86	1.04	0.86
12 おおかた	0	0 0 1 1	0	0	0 1 1 **2**	0 1 1 1	0 1 1 **2**	**3 3** **3 4**	**4 4** **3 3**	**6 4** **4 4**	**5 4** **4 4**	**5**	9 8 8 **6**	9 8 8 **6**	9 8 8 8	9 8 8 **7**	1.24	0.76	0.86	0.67
13 もしかしたら	0 1 0 1	0 0 0 1	0	0 0 0 1	0 *2* *2* **3**	0 1 0 1	0 0 0 1	0 0 0 1	0 1 0 1	0 1 0 1	0 1 0 1	0 1 1 **3**	**5**	**6 6** **6 5**	**6 7** *7* **7**	**7 6** **6 6**	0.27	0.23	0.23	0.34
14 ことによると	0 0 0 1	0	0	0 0 0 1	0 0 0 1	0 1 0 1	0 0 0 1	0 0 0 1	0 1 0 1	0 1 0 1	0 0 0 1	0 1 1 **3**	**3 3** **3 4**	**5**	**6 6** **7 7**	**7 6** **7 6**	0.19	0.12	0.29	0.26
15 どちらともいえない	0	0 0 0 1	0	0	0 1 0 1	0 0 0 1	0 0 0 1	0 0 0 1	0 0 0 1	0 1 0 0	0 1 0 1	0 1 1 1	**3 2** *2* **2**	**3 3** **2 2**	**5**	**4 3** **3 2**	0.04	0.00	0.00	0.00
16 ひょっとして	0 0 0 1	0	0	0 0 0 1	0 1 0 1	0 1 0 1	0 0 0 1	0	0 0 0 1	0	0 0 0 1	0 1 1 **2**	**2 3** **3 3**	**2 3** **2 3**	**5 6** **6 7**	**5**	0.00	0.00	0.09	0.10

注 1)　ます内の左上の数値 k は大学生，右上は中学2年，左下は小学6年，右下は小学4年の判断結果である。(Table 3～6 についても同じである)

注 2)　数値 k は行のことばがそれに対応する列のことばよりも実現の程度（確信）がより大であると判断された比率（k）を示す。

注 3)　比率（k）は　$k/10+0.099 \geqq$ 比率$(k) \geqq k/10$（ただし，$k=0, 1, 2 \cdots\cdots 9$）を意味する。
ゴチック体の数値 k は本文中の75%基準に該当することを示す。すなわち，その比率（k）が $0.750 \geqq$ 比率$(k) \geqq 0.250$　また，イタリック体の数値は80%基準に該当し，その比率（k）が $0.250 >$ 比率$(k) \geqq 0.200$ か $0.800 \geqq$ 比率$(k) > 0.750$ である。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

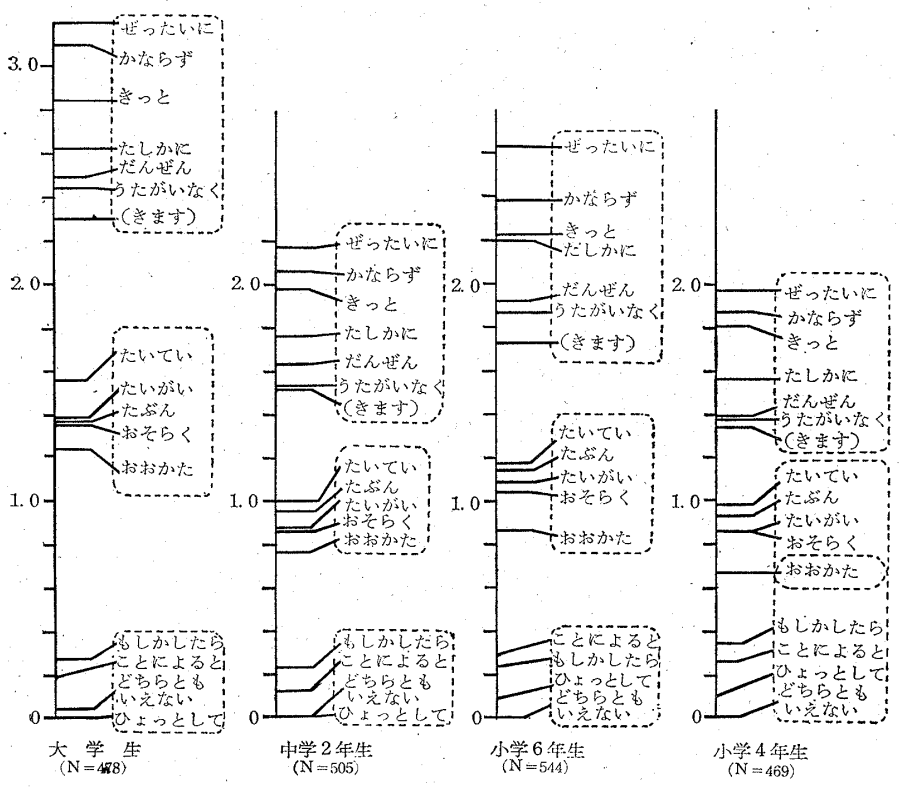

Fig. 1 実現の程度量（確信）表現用語の尺度値図

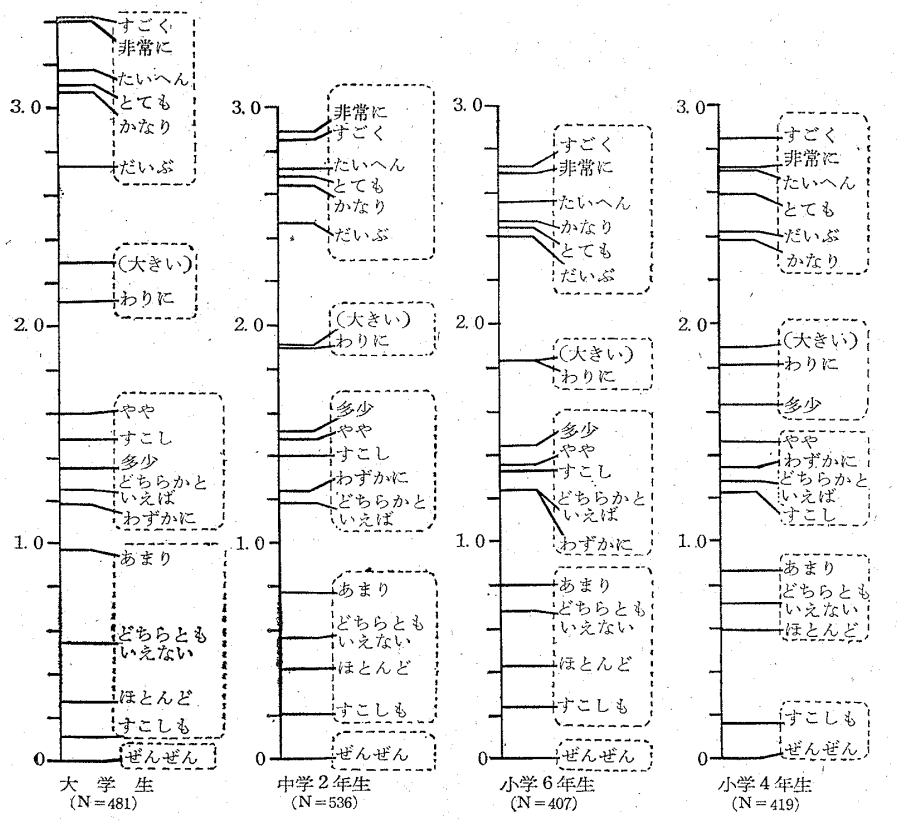

Fig. 2 実現の程度量表現用語の尺度値図

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

大学生群の結果から，次の4群に大別できる Table 3, Fig. 2)。

1. 最高度をあらわす語で，次の2つに下位分類できる。
　1.1　すごく，非常に，(たいへん)
　1.2　(たいへん)，とても，かなり，だいぶ
2. 中程度をあらわす語で，「わりに」と修飾語を取らない表現，ここでは「大きい」の2語である。
3. 低度をあらわす語で，2つに下位分類できる。
　3.1　やや，すこし，(たしょう)
　3.2　(たしょう)，どちらかといえば，わずかに
4. 零度をあらわす語で，3つに下位分類できる。
　4.1　あまり，(どちらともいえない)
　4.2　(どちらともいえない)，(ほとんど)
　4.3　(ほとんど)，すこしも
5. 絶対零度をあらわす「ぜんぜん」がここに属する。

しかし，低学年になるにしたがって大学生群で可能であった下位分類が困難になることがうかがえる。

Ⅲ．時間的程度量（頻度）表現用語（調査Ⅲ）

ここに属することば相互間の理解をみると，大学生群の結果と他の3群の結果との間にいくつかの相違点がみられる（Table 4, Fig. 3)。大学生群の結果から，頻度表現語16語は次のように分類できる（75%基準)。

1. 高頻度を意味する語で，「いつも」「しじゅう」「し

Table 3　現実の程度量表現用語の比率行列と尺度値
（小学4年419名，小学6年407名，中学2年536名，大学生481名）

	1 すごく	2 ひじょうに	3 たいへん	4 とても	5 かなり	6 だいぶ	7 (大きい)	8 わりに	9 やや	10 すこし	11 たしょう	12 どちらかといえば	13 わずかに	14 あまり	15 どちらともいえない	16 ほとんど	17 すこしも	18 ぜんぜん	尺度値 大学生	中学2年	小学6年	小学4年
1 すごく	5	4 3 4 5	8 8 7 8	8 6 7 7	8 7 8 8	8 6 6 6	9	9	9 9 8 9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	3.42	2.85	2.72	2.85
2 ひじょうに	5 6 5 4	5	7 6 5 4	8 8 8 6	8 8 7 7	9 8 7 7	9 9 9 8	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	3.40	2.89	2.69	2.71
3 たいへん	1 1 2 1	2 3 4 5	5	6 7 7 7	5 4 3 6	8 8 7 7	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	3.17	2.72	2.56	2.70
4 とても	1 3 2 2	1 1 1 3	3 2 2 2	5	7 5 6 7	7 6 5 6	9	9	9	9	9	9 9 9 8	9	9	9	9	9	9	3.10	2.68	2.44	2.59
5 かなり	1 2 1 1	1 1 2 2	4 5 6 3	2 4 3 2	5	8 7 6 5	7 8 8 7	9 9 9 8	9	9	9 9 9 7	9	9	9	9	9	9	9	3.07	2.64	2.47	2.38
6 だいぶ	1 3 3 3	0 1 2 2	1 1 2 2	2 3 4 3	1 2 3 4	5	7 8 8 8	9 8 8 8	9	9	9	9 9 9 8	9 9 9 8	9	9	9	9	9	2.73	2.47	2.40	2.42
7 (大きい)	0 0 0 0	0 0 0 1	0	0	2 1 1 3	2 1 1 1	5	7 5 5 4	8 7 7 7	8	8 7 7 6	9 8 8 8	8 7 7 7	9	9	9	9	9	2.29	1.91	1.83	1.89
8 わりに	0	0	0	0 0 0 1	0 0 1 1	0 1 1 1	2 4 4 5	5	9 8 8 7	8	9 8 7 6	9 9 8 8	9 8 8 7	9	9	9	9	9	2.11	1.90	1.83	1.81
9 やや	0 0 1 0	0	0	0	0	0	1 2 2 2	1 1 1 2	5	4 4 4 5	5 4 4 3	7 7 6 6	8 7 6 6	8 9 8 8	9 9 8 8	9	9	9	1.60	1.48	1.35	1.46
10 すこし	0	0	0	0	0	0	1	1	5 5 5 4	5	4 4 3 2	7 6 6 6	8 8 7 5	6 7 8 7	9 8 8 7	9	9	9	1.48	1.40	1.33	1.22
11 たしょう	0	0	0	0	0 1 1 2	0	1 2 2 3	1 2 2 3	4 5 5 6	5 5 6 7	5	6 6 6 7	7 7 6 7	8 9 8 8	9 9 8 8	9	9	9	1.35	1.51	1.44	1.63
12 どちらかといえば	0	0	0	0 0 0 1	0	0 0 0 1	0 1 1 1	0 0 1 1	2 2 3 3	2 2 3 4	3 3 3 2	5	4 3 4 4	7 7 7 7	9 9 9 8	9 9 9 8	9	9	1.25	1.18	1.24	1.28
13 わずかに	0	0	0	0	0	0 0 0 1	1 2 2 2	0 1 1 2	1 2 3 3	1 1 2 4	2 2 3 2	5 6 5 5	5	7 7 7 7	9 8 8 7	9 9 9 8	9	9	1.18	1.24	1.24	1.34
14 あまり	0	0	0	0	0	0	0	0	1 0 1 1	3 2 1 2	1 0 1 1	2 2 2 2	2 2 2 2	5	4 4 4 5	9 8 8 7	9 8 9 9	9	0.97	0.77	0.80	0.86
15 どちらともいえない	0	0	0	0	0	0	0	0 0 0 1	0 0 1 1	0 1 1 2	0 0 1 1	0 0 0 1	0 1 1 2	5 5 5 4	5	7 6 6 6	9 8 8 8	9 8 8 8	0.54	0.56	0.68	0.71
16 ほとんど	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 0 0 1	0 0 0 1	0 1 1 2	2 3 3 3	5	6 6 6 7	9	0.27	0.42	0.43	0.59
17 すこしも	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 1 0 0	0 1 1 1	3 3 3 2	5	8	0.11	0.21	0.24	0.16
18 ぜんぜん	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 1 1 1	0	1	5	0.00	0.00	0.00	0.00

注 1)　数値 k は行のことばがそれに対応する列のことばよりも現実の程度がより大であると判断された比率（k）である。

注 1)　表のみかたおよび比率（k）の意味については Table 2 の注を参照のこと。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

よっちゅう」「よく」がここに属す。

2. 中度の頻度を意味する語で，2つに下位分類できる。

2.1　たびたび，しばしば，ときどき，ちょいちょい

2.2　たまに，ときたま

3. 低頻度をあらわすもので，2つに分類される。

3.1　あまり，まれに

3.2　めったに，ほとんど

4. 零度表現語で，「ぜんぜん」「まったく」がある。

他の3群においても，大分類においては大学生群の結果とほぼ同じであるが，他の3群とも大学生の結果による大分類2に属する語相互間の意味が未分化で，大学生群のように下位分類できない。また，大分類3の「まれに」は「たびたび」「しばしば」「ときどき」の大分類2と同じ意味に解されており，大学生群の結果と他の3群の間に大きなはずれのあることがわかる。さらに，被験者群の80%以上の判断が一致しているかどうかという基準（80%基準）では，小学4年生群では大分類1と22と3，3と4に属することば相互間の意味分化があいまいであることがわかる。

Ⅳ．心理的時間（過去）表現用語（Ⅳ—1）

調査過去表現用語9語はごく新しい過去を表現するものとそれよりも古い過去を表現するものに大分類できる（Table 5）。これは，他の程度量表現用語が3つ以上に大分類されたのに対し大きな特徴といえましょう。しかし，大学生群においては，心理的時間表現用語相互間の意味づけの差異がかなりはっきりしている。すなわち，

1. 古い過去を表現するものはさらに3つに下位分類される。古い順に示せば，次の通りである。

Table 4　時間的程度量（頻度）表現用語の比率行列と尺度値

（小学4年545名，小学6年472名，中学2年508名，大学生479名）

	1 いつも	2 しじゅう	3 しょっちゅう	4 よく	5 たびたび	6 しばしば	7 ときどき	8 ちょいちょい	9 たまに	10 ときたま	11 あまり	12 まれに	13 めったに	14 ほとんど	15 ぜんぜん	16 まったく	尺度値 大学生	尺度値 中学2年	尺度値 小学6年	尺度値 小学4年
1 いつも	5	5 6 6 6	4 5 5 5	7 5 6 5	9 9 9 8	9 9 9 8	9 8 9 8	9 9 9 8	9 9 9 8	9 9 8 8	9 8 9 8	9 9 9 8	9 7 9 8	9 8 9 8	9 9 9 8	9 9 9 8	2.82	2.33	2.49	1.90
2 しじゅう	4 3 3 3	5	6 4 5 4	7 5 6 5	9 8 8 7	9 8 8 8	9 8 8 7	9 8 8 7	9 8 8 7	9 8 8 7	9 8 8 7	9 8 9 8	9 8 9 8	9 8 9 7	9 8 9 8	9 8 9 8	2.72	2.02	2.26	1.66
3 しょっちゅう	5 4 4 4	3 5 5 5	5	6 4 4 4	9 8 8 8	9 8 8 8	9 8 8 7	9 8 9 7	9 8 8 7	9 8 9 8	9 8 8 8	9 8 8 8	9 8 9 8	9 8 9 8	9 9 9 8	9 8 9 8	2.64	2.08	2.30	1.71
4 よく	2 4 3 4	2 4 3 4	3 5 5 5	5	8 9 9 8	9 9 9 8	9 8 8 8	9 9 9 8	9 9 8 8	9 9 9 8	9 9 9 8	9 9 8 8	9 9 9 8	9 9 9 8	9 9 9 8	9 9 9 8	2.61	2.25	2.37	1.82
5 たびたび	0 0 0 1	0 1 1 2	0 1 1 1	1 0 0 1	5	6 6 6 5	7 4 4 3	6 5 6 5	8 6 6 5	9 6 6 5	9 8 8 7	9 5 5 5	9 8 9 8	9 8 9 8	9 9 9 8	9 9 9 8	1.93	1.40	1.60	1.17
6 しばしば	0 0 0 1	0 1 1 1	0 1 1 1	1 0 0 1	3 3 3 4	5	6 3 3 3	5 4 4 4	9 6 6 4	9 6 5 4	9 8 8 7	9 6 6 4	9 8 8 7	9 8 8 8	9 8 9 8	9 8 9 8	1.88	1.27	1.41	1.02
7 ときどき	0 1 0 1	0 1 1 2	0 1 1 2	0 1 1 1	2 5 5 6	3 6 6 6	5	3 5 5 6	9 8 8 8	9 8 8 7	9 8 9 8	9 6 5 5	9	9	9	9	1.79	1.58	1.74	1.42
8 ちょいちょい	0 0 0 1	0 1 1 2	0 1 0 2	0 0 0 1	3 4 3 4	4 5 5 5	6 4 4 3	5	9 7 7 5	8 6 6 5	9 8 8 7	9 5 5 5	9 8 9 8	9 8 9 8	9 9 9 8	9 8 9 8	1.78	1.32	1.50	1.15
9 たまに	0 0 0 1	0 1 1 2	0 1 1 2	0 0 1 1	1 3 3 4	0 3 3 5	0 1 1 1	0 2 2 4	5	5 6 5 5	8 8 9 8	8 5 5 5	9 9 9 8	9 9 9 8	9	9	1.32	1.25	1.40	1.19
10 ときたま	0 0 1 1	0 1 1 2	0 1 0 1	0 1 0 1	0 3 3 4	0 3 4 5	0 1 1 2	1 3 3 4	4 3 4 4	5	8	9 5 5 5	9 9 9 8	9 9 9 8	9	9	1.28	1.26	1.36	1.15
11 あまり	0 1 0 1	0 1 1 2	0 1 1 1	0 0 0 1	0 1 1 2	0 1 1 2	0 1 0 1	0 1 1 2	1 1 0 1	1	5	4 2 2 2	9 7 8 7	9 8 8 7	9 9 9 8	9 9 9 8	0.92	0.77	0.83	0.71
12 まれに	0 0 0 1	0 1 0 1	0 1 1 1	0 0 1 1	0 4 4 4	0 3 4 5	0 3 4 4	0 4 4 4	1 4 4 4	0 4 4 4	5 7 7 7	5	8 8 8 7	8 7 8 7	9 8 9 8	9 8 8 7	0.76	1.08	1.31	1.02
13 めったに	0 2 0 1	0 1 1 1	0 1 0 1	0 0 0 1	0 1 0 1	0 1 1 2	0	0 1 0 1	0 0 0 1	0 0 0 1	0 2 1 2	1 1 1 2	5	4 4 4 3	9 8 9 8	9 8 9 7	0.45	0.45	0.49	0.44
14 ほとんど	0 1 0 1	0 1 0 2	0 1 0 1	0 0 0 1	0 1 0 1	0 1 1 1	0	0 1 0 1	0 0 0 1	0 0 0 1	0 1 1 2	1 2 1 2	5 5 5 6	5	9 8 9 8	8 8 8 7	0.41	0.39	0.48	0.44
15 ぜんぜん	0 0 0 1	0 1 0 1	0 0 0 1	0 0 0 1	0 0 0 1	0 1 0 1	0	0 0 0 1	0	0	0 0 0 1	0 1 0 1	0 1 0 1	0 1 0 1	5	4 3 3 2	0.04	0.00	0.00	0.00
16 まったく	0 0 0 1	0 1 0 1	0 1 0 1	0 0 0 1	0 0 0 1	0 1 0 1	0 0 0 1	0 1 0 1	0	0	0 0 0 1	0 1 1 2	0 1 0 2	0 2 1 2	5 6 6 7	5	0.00	0.07	0.06	0.16

注 1)　数値 k は行のことばが，それに対応する列のことばよりも時間的程度（頻度）がより大であると判断された比率（k）である。

注 2)　表のみかたおよび比率（k）の意味については Table 2 の注を参照のこと。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

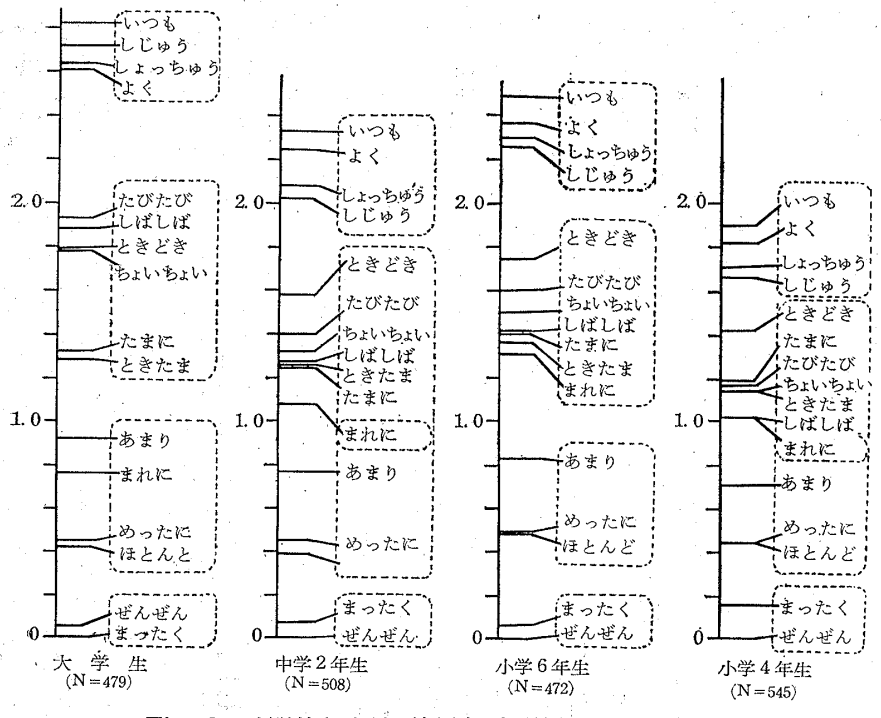

Fig. 3　時間的程度量（頻度）表現用語の尺度値図

Table 5　心理的時間表現用語（過去）の比率行列と尺度値
（小学4年578名，小学6年477名，中学2年536名，大学生323名）

	1 とうに	2 すでに	3 せんこく	4 もう	5 さきほど	6 さっき	7 いましがた	8 いま	10 たったいま	尺度値 大学生	中学2年	小学6年	小学4年
1 とうに	**5**	8 **7** **7** 6	8 7 **7** **6**	9 8 8 8	9 8 8 7	9 8 8 7	9 8 9 8	9 8 8 8	9 8 8 8	3.06	1.85	1.88	1.47
2 すでに	1 **2** **2** **3**	**5**	**6** **6** **6** **5**	7 **7** 7 **6**	7 7 8 **6**	7 8 7 **6**	9 8 8 8	9 8 8 8	9 8 8 8	2.45	1.57	1.63	1.23
3 せんこく	1 *2* **2** **3**	**3** **3** **3** **4**	**5**	**6** **6** **5** **5**	8 **7** **6** **6**	7 **6** **6** **6**	9 8 8 8	9 8 8 7	9 8 8 7	2.33	1.34	1.36	1.04
4 もう	0 1 1 1	*2* **2** *2* **3**	**3** **3** **4** **4**	**5**	**5** **4** **6** **4**	**5** **5** **6** **5**	9 8 8 8	9 8 8 8	9 8 8 8	1.88	1.03	1.14	0.90
5 さきほど	0 1 1 *2*	*2* *2* 2 **3**	1 **2** **3** **3**	**4** **5** **4** **5**	**5**	**5**	9 8 8 8	9 8 9 8	9 8 8 8	1.86	1.07	1.13	0.94
6 さっき	0 1 1 *2*	*2* 1 *2* **3**	*2* **3** **3** **3**	**4** **4** **3** **4**	**4**	**5**	9 8 8 8	9 8 9 8	9 8 9 8	1.79	1.05	1.10	0.90
7 いましがた	0 1 1 1	0 1 1 1	0 1 1 1	0 1 1 1	0 1 1 1	0 1 1 1	**5**	9 7 **7** **7**	9 8 8 7	0.77	0.43	0.39	0.23
8 いま	0 1 1 1	0 1 1 1	0 1 1 *2*	0 1 1 1	0 1 0 1	0 1 0 1	0 *2* **2** **2**	**5**	8 7 *7* *7*	0.36	0.21	0.19	0.12
9 たったいま	0 1 1 1	0 1 1 1	0 1 1 *2*	0 1 1 1	0 1 1 1	0 1 0 1	0 1 1 *2*	1 *2* *2* *2*	**5**	0.00	0.00	0.00	0.00

注 1）　数値 k は行のことばがそれに対応する列のことばよりも，より古い過去をあらわすと判断された比率（k）を示す。

注 2）　表のみかたおよび比率（k）の意味については Table 2 の注を参照のこと。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

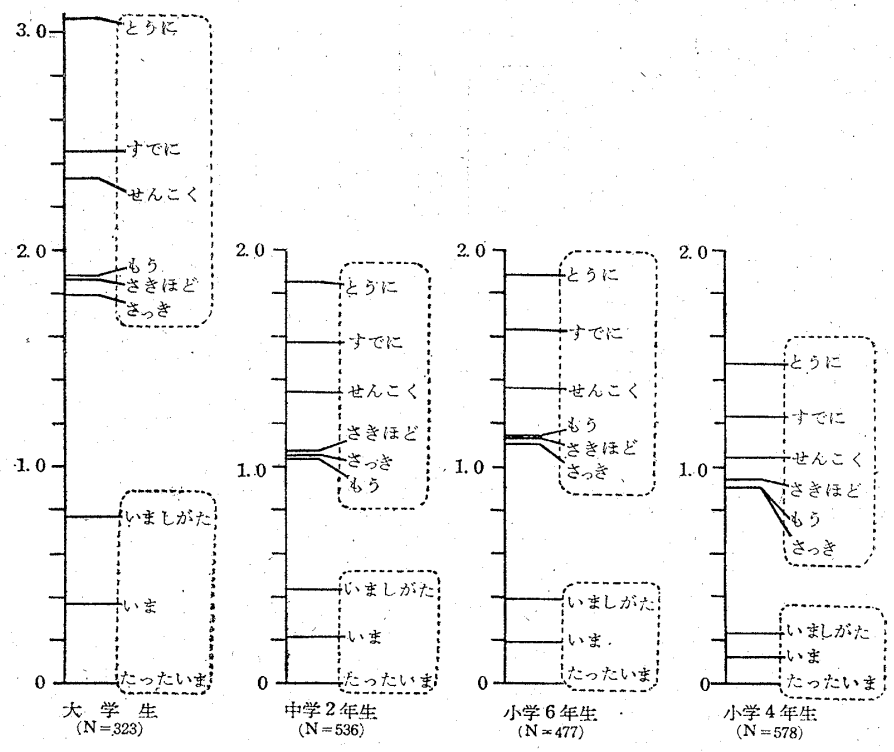

Fig. 4　心理的時間（過去）表現用語の尺度値図

Table 6　心理的時間表現用語（未来）の比率行列と尺度値
（小学4年577名，小学6年479名，中学2年532名，大学生323名）

	1 ただちに	2 すぐに	3 いまにも	4 いまに	5 まもなく	6 ほどなく	7 やがて	8 ちかじか	9 そのうちに	10 とおからず	尺度値 大学生	中学2年	小学6年	小学4年
1 ただちに	**5**	**7** 6 4 4	8 7 8 7	8 **7** **6** **5**	9 8 8 8	9 9 8 8	9	9 9 9 8	9	9	2.81	2.44	2.20	1.70
2 すぐに	**2** **3** **5** **5**	**5**	**4** **4** **6** **7**	9 8 8 7	9 9 **7** 8	9	9	9	9	9	2.58	2.13	2.22	1.89
3 いまにも	1 2 1 2	**5** **5** **3** **2**	**5**	8 7 **6** **5**	8 8 **7** 7	9 8 7 7	9 9 9 8	9 9 8 7	9	9 9 8 9	2.36	1.94	1.63	1.38
4 いまに	1 **2** **3** **4**	0 1 1 2	1 2 **3** **4**	**5**	**6** **7** 7 7	**6**	9	9 9 8 8	9	9 9 9 8	1.75	1.61	1.62	1.49
5 まもなく	0 1 1 1	0 0 **2** 1	1 1 **2** 2	**3** **2** 2 2	**5**	**6** **7** 7 **6**	8 8 8 7	9 8 **7** **6**	9	9 9 8 8	1.61	1.31	1.30	0.90
6 ほどなく	0 0 0 1	0	0 1 2 2	**3**	**3** **2** 2 **3**	**5**	**6** **5** **5** **5**	8 **5** **5** **4**	8 **6** **7** **6**	9 7 7 7	1.22	0.71	0.72	0.54
7 やがて	0	0	0 0 0 1	0	1 1 1 2	**3** **4** **4** **4**	**5**	**6** **4** **4** **3**	7 **6** **7** **7**	8 **7** **6** **6**	0.73	0.42	0.38	0.33
8 ちかじか	0 0 0 1	0	0 0 1 2	0 0 1 1	0 1 **2** **3**	1 **4** **4** **5**	**3** **5** **5** **6**	**5**	7 **7** 7 7	8 8 8 7	0.64	0.55	0.63	0.60
9 そのうちに	0	0	0	0	0	1 **3** **2** **3**	2 **3** **2** **3**	2 **2** 2 2	**5**	**6** **6** **5** **5**	0.19	0.19	0.00	0.00
10 とおからず	0	0	0 0 1 1	0 0 0 1	0 0 1 1	0 2 2 2	1 **2** **3** **3**	1 1 1 2	**3** **3** **4** **4**	**5**	0.00	0.00	0.11	0.20

注 1)　数値 k は行のことばがそれに対応する列のことばよりも，より現在に近いと判断された比率（k）を示す。

注 2)　比率行列の見方および比率（k）の意味については Table 2 の注を参照のこと。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

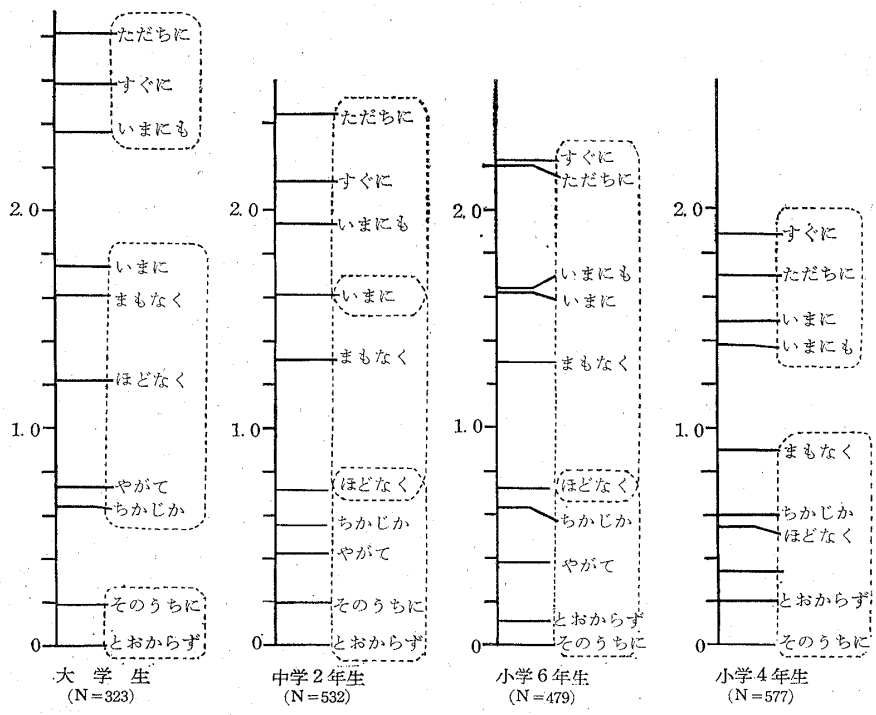

Fig. 5　心理的時間（未来）表現用語の尺度値図

1.1　とうに

1.2　すでに，せんこく，（もう）

1.3　（もう），さきほど，さっき

2. 新しい過去を表現するものは，次のように下位分類される。新しい順に示せば，

2.1　たったいま

2.2　いま

2.3　いましがた

これに対して，小学4年，6年では大分類の1と2間の意味づけの差ははっきりと理解されているが，同一の大分類に属する語相互間の意味の差異はあいまいである。

V．心理的時間（未来）表現用語（調査IV—2）

未来表現用語は，過去表現用語以上に大学生群と他の8群の結果間に大きな差異がみられる。一般的にみて，大学生群以外の群においては，共通理解があまり成立していないといえよう。大学生群の結果によれば，次のように分類できる（Table 6）。

1. ごく近い未来表現語として，「ただちに」「すぐに」「いまにも」
2. 少し遠い未来表現語として，「いまに」「まもなく」「ほどなく」「やがて」「ちかじか」
3. 遠い未来表現語として，「そのうちに」「とおからず」がある。

これに対して，中学，小学と年齢が低くなるにつれて未来表現語相互間の意味の差があいまいになる。たとえば，小学4年では(1)近い未来を表現する「ただちに」「すぐに」「いまにも」「いまに」と(2)遠い未来をあらわす残りの6語の2つに大分類できるにすぎない（Table 6，Fig. 5）。

考　　察

一対比較法を用いて調査した程度量表現用語は，主として程度量副詞といわれているものである。森（1964）は国文法学の観点から程度量副詞を「程度の副詞」と「時の副詞」に大別し，さらに，程度量副詞のあらわす程度量にもとづく分類を行なっている。たとえば，「程度の副詞」の1種である「現実の程度を量る副詞」は，(a)最高度を量る「最も」「とびきり」，(b)比較的高度の「ずっと」「ひときわ」「きわめて」，(c)高度の「はなはだしく」「とても」「たいへん」「非常に」，(b)相当度の「かなり」「なかなか」，(e)低度の「やや」「いくらか」「すこし」に分類できるという。しかし，程度量副詞の国文法学的な観点からの理解とわれわれの日常生活における理解とが，必ずしも一致しないであろうことは容易に想像できる。ここで用いた程度量表現用語を含めて，言語が心理学研究における人間理解のための有効な手段となるためには，少なくとも研究対象である被験者の言語に対する理解の実態が，把握されなければならないであろう。

今回の実態調査によって，程度量表現用語相互間の程

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

度量に関する児童・生徒・学生の理解の実態をある程度知ることができた。たとえば，大学生群においても，「たいへん」「とても」「かなり」の3語間の程度量に関する意味の差異は，不明確であることがわかった。これは，「たいへん……である」という表現と「とても……である」や「かなり……である」との間に程度に関して有意な意味の差があると考えるのは，解釈のしすぎであることを示唆するものといえよう。この場合，「たいへん」「とても」「かなり」のいずれの副詞が使用されるかは，使用するものの語感やその時の気分などによって決定されると考えるのが妥当であろう。

従来の評定尺度構成の手続きにおいて，多数ある程度量表現用語から，判断カテゴリー用語としていかなることばを選ぶかは，研究者の程度量表現用語の理解と経験にもとづいて行なわれていた。しかし，この調査結果は被験者の程度量表現用語の理解の実態を知ることなく，研究者の理解を唯一の手がかりとして行なうことの危険を示唆するものといえよう。その他，評定尺度の判断カテゴリー用語決定にあたり，配慮すべき点が示唆された。まず第1に，評定尺度の判断カテゴリー用語として決定された程度量表現用語相互間の程度量に関する意味分化が，研究者自身はもちろんのこと被験者群においても成立していなければならない。たとえば，判断カテゴリー用語相互間の程度量に関する意味分化が，被験者群において75%基準で成立していなければならないとした場合，被験者が大学生であれば，「やや＞わずかに（Table 3)」の関係が理解されているから，同一尺度の異なる判断カテゴリーの用語としてこれらの2語を用いることができる。しかし，小・中学生において，「やや＞わずかに（Table 3)」の理解は75%基準で成立していない。そのため，大学生を被験者とした調査では使用可能な「やや」と「わずかに」を含む評定尺度は，小・中学生を対象にした調査に用いることは不適切である。次に，研究者と被験者の間に程度量表現用語理解に大きなずれのあることばの使用はさけるべきであろう。たとえば，実現の程度量表現用語の「断然」「うたがいなく」「(きます)」(Table 2)，現実の程度量表現用語の「わずかに」「だいぶ」(Table 3)，時間的程度量表現用語の「まれに」「しじゅう（小学4年)」(Table 4) などは，大学生群と小・中学生群間の結果に大きな違いのあるものであり，評定尺度用語として使用する場合はとくに注意を払う必要がある。

これまでの考察からも明らかなように，ことばが心理学研究のより有効な手段となるためには，少なくとも被験者の用いることばの意味と研究者のそれが一致するか，一致しないとすれば，研究者のもついかなることばと対応するかなど，被験者の理解することばの意味の実態が明らかにされねばならない。これは被験者の年齢が低い程重要である。たとえば，幼児が「いたい」といったとき，その意味はわれわれ成人の「痛い」であるこもあろうし，「痒い」ことであり，また「つめたい」ことであるかもしれない。その他，関東と関西といった地域の違いによっても，同じことばのもつ意味やそのニュアンスに多少の差異があるであろうし，時代によっても変化するであろう。このようにことばの意味，ニュアンスが流動的なものであればあるほど，ことばの意味の実態を明らかにすることが必要である。なぜならば，意味の実態を明らかにすることなく，ことばによる正しい人間理解はありえないからである。

要　　約

評定尺度研究の一環として程度量表現用語の意味づけに関する実態調査を，一対比較法を用いて行なった。選ばれた程度量表現用語は，(1)実現の程度量（確信）表現用語（16語），(2)現実の程度量表現用語（18語），(3)時間的程度量（頻度）表現用語（16語），および，(4)心理的時間表現用語（18語）であり，調査対象は小学4年生（延べ2,588名），小学6年生（延べ2,379名），中学2年生（延べ2,617名）と大学生（延べ2,084名）であった。程度量表現用語の程度量に関する一対比較判断の結果にもとづき，判断の比率行列が作られ，また，尺度値が算出された。その結果，低学年の理解と大学生群の理解には大きなずれのみられる程度量表現用語のあることが明らかにされ，評定尺度の作成にあたり，判断カテゴリー用語の決定は研究者側の理解のみでなく，同時に被験者群の理解をも配慮しなければならないことが示唆された。

文　　献

ギルフォード J.P.（秋重義治監訳）1954　精神測定法，培風館（1959)，189—218.

近藤貞治・続有恒・大西誠一郎ほか　1966　質問紙法に関する基礎的研究—児童・生徒の人間表現的語彙の理解に関する基礎資料—　名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—　13，3—42.

森重敏　1964　日本国文法通論，風間書房，245—252.

織田揮準　1967　評定尺度構成に関する基礎的研究(Ⅰ)　名古屋大学教育学部紀要 —教育心理学科—　14，7—42.

続有恒・丸井文男ほか　1966　質問紙法に関する基礎的

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

研究—心理学的臨床分野における性格表現用語の検討，名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 13，59—74.

続有恒ほか 1967 反応パターンの解釈によるパーソナリティ検査の試み(1) 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 14，71—85.

続有恒・織田揮準・鈴木真雄 1970 質問形式による性格診断の方法論的吟味—Y-G性格検査の場合— 教育心理学研究，18，1，33—47.

山田良一ほか 1967 性格表現用語に関する基礎的研究—クリニカル・サイコロジストと一般成人との比較検討— 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 14，59—69.

<付記> 本研究を進めるにあたり，終始ご指導，ご援助いただきました名古屋大学教育学部教育心理学教室の諸先生に感謝するとともに，調査の実施にあたりご協力いただいた岡崎市内の梅園小学校，根石小学校，三島小学校，連尺小学校，羽根小学校，矢作南小学校，城北中学校，葵中学校，矢作中学校，安城市内の安城南中学校，名古屋市内の荒子小学校，常磐小学校，大江中学校，愛知学院大学，名古屋市立保育短期大学，大同工業大学の諸先生と児童・生徒・学生のかたがたにも心からお礼を申し上げます。また，資料の処理にあたり，ご援助いただいた名古屋大学教育学部電子計算機室の佐々木雅子氏にも記してここに感謝の意を表します。

(1970年4月17日原稿受付)

ABSTRACT

A PSYCHOLOGICAL STUDY ON THE JAPANESE QUALITATIVE AND QUANTITATIVE WORDS

By
KIJUN ODA
Nagoya Municipal Women's Junior College

This study is on the developmental changes in meanings of the Japanese qualitative and quantitative words (most of them are adverbs) by means of the paired-comparison method. The qualitative and quantitative words are classified on the basis of the following four categories of meanings:

(1) 18 words which express degree of common things (TEST I) ; *sugoku, hijōni, taihen, totemo, kanari,* etc.

(2) 16 words which express degree of probability (TEST II); *zettaini, kanarazu, kitto, tashikani, tabun,* etc.

(3) 16 words which express degree of frequency (TEST III); *itsumo, yoku, tabitabi, tokidoki, mareni,* etc.

(4) 18 words which express degree of psychological time-distance (TEST IV);

a. 10 words which express the future; *suguni, imani, mamonaku, yagate,* etc.

b. 9 words which express the past: *tōni, senkoku, sakihodo, ima,* etc.

The subjects are required to answer the following questions.

For instance;

TEST I { a. *taihen* ōkii / b. *yaya* ōkii

TEST II { a. *tabun* kimasu / b. *tashikani* kimasu

The subjects are required to answer which means larger size (TEST I) and which expresses more probable meaning (TEST II).

The sublects are 2,588 4th grade children (10 years old), 2,379 6th grade children (12 years old), 2,617 8th grade children (14 years old), and 2,084 students. The results show that even the subjects of the same age vary in their interpritation of the qualitative and quantitative words, and the older subjects can understand more sharply the difference of their meanings.

NII-Electronic Library Service